

平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	管 28K04	氏 名	東島 正和
研究主題 —副主題—	児童の実態に即した「いじめ」アンケートの作成に関する一考察		
派遣先	玉川大学教職大学院	担当教官	田原 俊司
所属校	江東区立浅間堅川小学校	校長	北島 陽彦

キーワード： いじめ、アンケート、いじめ項目、プレアンケート、チェックシート

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

「いじめ防止対策推進法(平成25年法律第71号)」の(いじめの早期発見のための措置)第十六条で「学校の設置者及びその設置する学校は、当該学校におけるいじめを早期に発見するため、当該学校に在籍する児童等に対する定期的な調査その他の必要な措置を講ずるものとする。」と法律で調査をすることが義務付けられている。

東京都でも「東京都いじめ防止プログラム」の中で、いじめの「見える化」として子供の日常生活からいじめの芽を素早く察知することとして、定期的な「生活意識調査」の実施が挙げられている。

被害者の子供、周囲の子供からのいじめ情報の確実な受信することとしては、「効果的な『いじめ実態調査』の実施・分析・活用していく必要がある。学校は、実態調査で収集した情報に基づき、子供に対して事実確認するに当たっては、必要に応じてスクールカウンセラーと協力し、子供たちに心理的負担を与えないよう配慮する。」ことで、アンケートをいじめの防止策の一環として実施することを決めている。

「平成 25 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、「いじめ発見のきっかけ」の 52.3%がアンケート調査からの発見となっている。全教職員で発見できたのはわずか 15%ほどであった。アンケートはいじめを発見するための“一つの資料”として外すことはできない。しかし、いじめの事件は起こる。なぜこのような矛盾がおこるのか。その手段として、子供自身にアンケート調査のプレアンケートを実施した。目的は、アンケートに正直に答えることができるのか、記名と無記名ではどちらがよいか、どのような項目なら答えられるかを集計することであった。「さらに、直接子供にも聞き取りを行い、より信頼性のあるアンケートを実施していく。項目の中にはいじめに関する項目、現在の身体的状況が把握できるアンケートにし、妥当性のある内容にしていって。」

2 研究の内容・研究の方法

① プレアンケートの実施

6月に1回目の「いじめ」アンケートを行った。その後、教師用アンケートと子供への「プレアンケート」を実施した。その目的は、アンケートに対しての意識や考えを集約し、より信頼性と妥当性の高いアンケートにしていくことであった。例えば、アンケートに対して本当に正直に回答できるか。回答できないのであれば、何を改善していけばよいか。改善の余地はないか、改善の余地があるのであればどのように改善していけばよいかを子供の実態に沿って改善していく。このプレアンケートを行うことで、より信頼性・妥当性が増すと考える。

② アンケート用紙の作成

「プレアンケート」の分析から「無記名方式で行う」、「いじめ項目の文章表現の工夫」、「楽しい項目は正直に書きやすい」という分析結果となった。「楽しい項目」を取り入れながら、「いじめの項目」の文末を『～されていない。』に変更した。その結果、子供が「被害にあっていると記入する方式」から「被害にあっていると記入しない方式」へと転換した。このことから、子供が正直にアンケートに回答することができ、アンケートの信頼性と妥当性をより高めることができると考えた。

③ アンケート調査後の対応

11月のアンケート分析から、項目に沿った観察ポイントを明示し、ポイントを参考に子供の観察を行った。また、「聞き取りについて」を教職員に配布し、聞き取りの資料とした。その中には、「聞き取り・声掛けの流れ」、「聞き取りにあつての注意」、「聞き取りと声掛けの違い」、「聞き取りの優先順位」、「聞き取りの方法」、「声掛け、聞き取り時の注意事項」、「参考資料」という内容で配布した。また、重回帰分析を用いて「学校の楽しさ」の要因を全校での傾向と、学年別の傾向を分析した。

3 研究の結果

プレアンケートを行なうことで、より子供の実態に即したアンケート項目を工夫し、信頼性と妥当性を高めることができた。また、プレアンケートの記述欄には、いじめについての意見が多数あり、子供一人一人のいじめの認識の高さが伺えた。

プレアンケートを基にアンケート用紙を作成し、被害者となる子供に抵抗なく調査することができた。

子供の中には、従来のアンケートの回答とは異なった回答があり、より正直に回答したと思われる。

このことから、アンケートの信頼性がより高まったといえる。

アンケート用紙を用いた子供観察週間を設定することで、教員へのいじめ意識の向上と観察ポイントの明確化を図ることができた。さらに、子供への声掛け、聞き取りの方法等の資料の配布により子供への対応方法を理解させることができた。また、学校生活の楽しさの要因についても少しではあるが検討できた。

回帰分析では、学校全体で、今回は以下の項目が学校生活の楽しさに影響を与えていた。また、影響が高い順に記載し、()内の数字は、標準化係数とする。

- ① 学校に毎日行きたい (23. 2)
- ② 友だちにどんな理由があってもいやなことをしてはいけないと思う (10. 7)
- ③ 休み時間は友だちと楽しく遊んでいる (9. 1)
- ④ 毎日の生活が楽しい (8. 1)
- ⑤ 仲間はずれにされていない(7. 1)
- ⑥ 相談したいことがあると誰かに相談できる。(5. 9)
- ⑦ ほとんどいらいらすることがない (5. 8)

上記のような環境が整っていれば、子供が楽しく学校に来ることができる要因となる可能性がある。

ストレスを少なくし、学年が上がるにつれて「休み時間は友達と楽しく遊ぶ」環境作りや、「友だちにどんな理由があってもいやなことをしてはいけない」雰囲気作りが子供たちにとって大切な要因になっている。さらに、「仲間はずれにされない」ことが高学年に共通して必要な項目となった。しかし、その他の項目「授業がわかる」、「みんなと仲がよい」など他の項目で、「学校が楽しい」要因となりうる。いじめを許さない雰囲気作りになるよう担任が指導することで、子供と担任との関係が良好になり、「相談したいことがあると誰かに相談できる」ようになれば、楽しく学校に来ることができる子供が増えていくと考える。

4 研究の考察

「いじめ」アンケート調査の根本は、やはり子供がどのくらい正直に書いてくれるかということである。そのために、アンケートに答えやすい項目や文面であることが求められる。また、アンケートで、大人が対応していこうという意味が見られることである。そして、「いじめ」をなくしていく対策は、まずは、「学校が楽しい」と思える要因を増やし、その要因を学校全体で高めていかななくてはならない。次に、「いじめ」アンケートを正直に書けるような、「いじめ」をよしとしない雰囲気作りを行うことである。そのためには適切な指導の下、「いじめ」を組織として完全に解決させ、子供と保護者との信頼関係を築いていくことがなにより重要である。プレアンケートを行なうことで、子供の実態が理解できる。また、学校側のいじめへの取組を子供に示し、子供との信頼関係の向上につながると考える。また、プレアンケート結果からのアンケート作成により、より子供の実態に即したアンケート作成ができる。アンケートを基に子供観察することで、一人一人の子供の実態を適切に把握することができ、教員へのいじめへの意識の向上が図られたと考える。また、根本的な「学校の楽しさ」の要因を増やし、高めていくことでいじめの抑制になると考える。

5 今後の展望

プレアンケートによる子供の実態に沿ったアンケートを作成し、信頼性、妥当性の更なる向上を図る必要がある。また、無記名については、第3・4学年の子供から「無記名だといじめが起こったことを書いても先生がだれだか分からないよ」という意見も出た。このことから、学年によって記名式でもよいと考える。また、高学年では、担任が今までいじめられている恐れがあると思われる子供が、「学校がたのしい」と書いており、記名式のアンケートからは読み取れなかった。しかし、今回のアンケートに初めて「学校が楽しくない」と回答し、その結果、担任も観察期間によく観察し、声掛けを行うことができた。このことから高学年では、無記名のアンケートの実施が望ましいと考える。

「学校が楽しい要因」はまだ他に多くあるので各学校でその要因を増やし、学校全体で高めていく必要がある。

「いじめ」への組織的な対応を行い、「いじめ」があれば担任だけでなく、学校全体で子供を全力で守る意識作りを促進していく必要がある。

